

## 英雄の死 : アキレウスとヘクトル

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 丹下 和彦   |
| 雑誌名 | 研究論集  |
| 巻   | 79  |
| ページ | 77-93   |
| 発行年 | 2004-02   |
| URL | <a href="http://doi.org/10.18956/00006304">http://doi.org/10.18956/00006304</a> |

## 英雄の死

—アキレウスとヘクトル—

丹 下 和 彦

### はじめに

『イリアス』全24歌15,693行の劈頭は怒り *μῆτις* という語で始まっている。「怒りを歌え、女神よ、ペレウスの子アキレウスの」(第1歌1行)<sup>1)</sup>というのがそれである。開巻劈頭の、しかも行初に置かれたこの怒りという語がもつ重みは、決して些少のものではない。作者ホメロスは、ここにおいて全歌を貫くテーマ〈怒り(アキレウスの)〉を一挙に提示したとみなしてよいのである。

〈怒り〉がなぜ全歌のテーマとなるのか。それはアキレウスのこの怒りが〈ゼウスの計画 *Διὸς βουλή*〉を呼び起し、それがひいてはパトロクロスの死を引き起し、アキレウスのさらなる怒りを誘発し、そしてヘクトルの死とトロイアの滅亡へと続くからである。

詩篇の題は『イリアス』となっている。イリアスとは、“イリオス(トロイアの別称)の歌”の意である。すなわちヘレネの誘拐に始まってトロイア城市の陥落に終るトロイア戦争を描く物語ということである。しかし作者ホメロスはそれを、戦争の一から十まですべてを、描くことはしなかった。戦中の1エピソードにすぎないアガ멤ノンとアキレウスの不和軋轢と、それから生じたアキレウスの怒りに焦点を当てることをもって、それに代えた。

時間も限定されている。10年に及ぶ戦い<sup>2)</sup>を最初から順を追って描くのではない。10年目の最後の約50日間の出来事を描くに止める。そのことも劈頭の6行目以下できっちり触れられている。「はじめアトレウスの子、民を統べる王アガ멤ノンと勇将アキレウスとが、仲違いして袂を分つ時より語り起して、歌い給えよ *ἔξ ὀῦ δῆ ῥὰ πρῶτα*」(第1歌6~7行)と。つまり以下の24歌で歌われるのは、戦争も10年目に入った年のある時点、総大将アガ멤ノンとアキレウスとが仲違いをした時よりあとの時間、戦争が終結をみる直前の約50日間のあいだのことなのである。

アキレウスの怒りとそれにまつわる事件という10年戦争の中の1エピソードにすぎぬことを歌うことが、果してイリオスの歌すなわちトロイア戦争全般を歌うことになるのか。作者が劈頭に掲げたテーマと題目で示されるものとは、一見齟齬する感がしないでもない。しかし作者は〈アキレウスの怒り〉という主題を追求しながら、その折々に過去あるいは未来の出来事を想起、予告などの形で詩篇中に巧みに取り込むことによって、結局は10年戦争全体を掴むことに成功しているといえるのである。

このことは、実はすでにアリストテレスが指摘しているところでもある。アリストテレスは、「彼（ホメロス）は、トロイア戦争さえも、それが初めと終りをもっていてもかかわらず、その全体をそのまま話につくることは試みなかった」ゆえに、他の詩人に比べてむしろ神技 *θεοπέσιος* の詩人であるといえるとしている<sup>9)</sup>。

しかしわたしたちが問題とするのは、こうした詩作技術の巧みさではない。「イリオスの歌」を歌うときになぜ〈アキレウスの怒り〉というエピソードが選ばれたのかという作歌の本質に関わる疑問である<sup>10)</sup>。「イリオスの歌」すなわちトロイア戦争を詩の素材にするなら、それを歌うにふさわしい歌い方があるのではないか。といて別に戦争の一から十を年代順に歌えというのではない。1エピソードをもって全体を歌うとしても、もっとふさわしいエピソードが他にあるのではないか。例えば戦争の発端となったヘレネ誘拐事件の被害者メネラオスこそアキレウスに優る主人公役を演じられるのではないか。

しかし作者ホメロスはトロイア戦争を歌うのにメネラオスではなくアキレウスを主人公に選んだ。アキレウスの怒りというエピソードを選んだ。いやまずアキレウスの怒りを歌うことが頭にあって、それを歌いつつトロイア戦争全般をも作品中に歌い込んだということであるかもしれない。いずれにしてもアキレウスの怒りを歌うことは、作者にとってきわめて意図的なことであつたと理解される。ではその意図とは何であつたのか。

## 1. アキレウス、怒る

アキレウスの怒り *μῆνις* には *οὐλόμενη* なる形容詞が付けられている。これは「破壊的な、有害な」の意味をもつ語である。事実アキレウスが怒り、戦場を離脱したのちギリシア軍は戦闘において劣勢となり、多大な損害を蒙ることになる。その意味で彼の怒りは有害であつた。テキストにはこうある、「アカイア勢（ギリシア軍）に教知れぬ苦難をもたらし、あまた勇士らの猛き魂を冥府の王に投げ与え、その亡骸は群がる野犬野鳥の啖うにまかせたかの呪うべき怒り」（第1歌2～5行）と。

これほどまでの怒りの原因は何か。それはギリシア軍の総大将アガメムノンとの不和軋轢である。軋轢の原因は何か。アガメムノンがアキレウスの戦場妻であるブリセイヌを取り上げて

我が物としたからである。なぜそうしたか。陣中に生じた悪疫を払うために自分の戦場妻であるクリュセイスをその父親クリュセスの許へ返さざるを得なくなったがためである。アガ멤ノンとアキレウスとの間には主従関係はない。それぞれ領地を治める領主としてその地位は対等である。しかし遠征軍の総大将を務めるアガ멤ノンは同類中の最高位者としての権力をもつ。アキレウスはアガ멤ノンの横車に腹を立てながらも、従わざるを得ない。アキレウスは言う、「われらが世にも恥知らずのあなたに随ってきたのはあなたの意に添うため、つまりはメネラオスならびにその厚顔無恥、犬にも似たあなたのために、トロイエ人から償い *τιμή*<sup>9</sup> を得るためであった。しかしあなたはそのことを全く考えようとせず、気にも留めておられぬ。今も今とて、わたしの苦勞の結晶、アカイアの子らがわたしにくれた分け前 *γέρας* を、自ら手を下して奪うと脅す。〈略〉わたしはもうプティエへ帰る、船団を率いて国許へ引き上げる方が遙かにまだからな。恥辱を受けながら *ἄτιμος* この地に留まり、あなたのためにせせと富を貯えてやるつもりはないのだ」(第1歌158～171行)と<sup>10</sup>。

これは単に下世話にいう女の取り合いではない。プリセイスは単なる“女”ではない。戦士が戦場で挙げた勲功に見合うものとして皆から認められ与えられた褒賞 *γέρας* である。それを他人に理不尽に奪われることは己の名誉 *τιμή* を穢されることを意味する。これは戦士にとって最大の屈辱である。アキレウスはアガ멤ノンから大いなる侮辱を受けたことになる。アキレウスの怒りは故なきことではないのである。以後彼は戦場を放棄する。抗議の意志表示である。

同時にしかしアキレウスは怒りにふるえる胸のうちを母親であるテティス女神に打ち明け、屈辱を晴らす手段をゼウス大神に計ってもらえるよう周旋を依頼する(393行以下)。テティス女神は不憫な息子の願いを聴き容れ、ゼウス大神にこれを取り次ぐ。ゼウスはこれを肯う。劈頭で触れられていた〈ゼウスの計画〉が、やや遅れてではあるが(第8歌)実施されるに至り、ギリシア軍の苦難が始まる。これは、アキレウスが戦場を離脱するといかにギリシア軍の力が落ちるか、アキレウスの力の偉大さを証明することになる。

テティス女神が息子アキレウスの現状を不憫に思う大きな原因の一つは、彼の人生が短く限定されたものとわかっているからである。彼女は言う、「命数短く、長くも生きられぬお前のことゆえ、せめて悲しみも悩みもなしに、船の陣屋に留まっていたらよかったのに。それが今となつては、短命であるばかりか、だれよりも惨めな身の上となつてしまった」(第1歌415～18行)と。命数が限られている上に名誉を得る場も閉ざされたとなつては、戦士として不憫である。まずはその存在の重さを周知せしめて名誉挽回を計らねばならない。それがギリシア軍の劣勢という、ゼウスの計画に外ならない<sup>11</sup>。そのあとに再び戦場に出て名誉をあげる途が用意されるが、いまはそれはさておく。

己の死が決して遠い未来のことでないことは、アキレウス自身も知っている。「母上よ、た

とえ命短きわたしとはいえ、あなたがわたしの母であるからには、高天に雷を鳴らしオリュンポスに住まいますゼウスにしても、せめて名誉なりとわたしに保証して下さいと然るべきであったでしょうに」(第1歌352～54行)なる言葉を、わたしたちは目にするからである。またのちにパトロクロスの死を経て再び戦場に戻ることを決心した折、愛馬クサントスが真近くに迫っている死を予言する条があるが、そのときもその予言を受けて彼アキレウスは言う、「クサントスよ、どうしてわたしの死を予言したりする。要らざることだ。わたしが父母から離れたこの地で果てる運命であることは、自分でよく承知している」(第19歌420～22行)と。この、近々に迫る死を宿命として受け容れたところに英雄アキレウスの原点がある。死と抱き合せて彼は生き、行動する。それは必然的に英雄としての生、生命と引き換えに名誉のみを追い求める生にならざるを得ない。

さてアキレウスのこの激しい怒りは、アガメムノンからの償いの品をたっぷり添えた和解の申し出を受けても終息しない(第9歌)。アガメムノンはアキレウス不在によって蒙った戦場での損害にたまりかね、老雄ネストルの忠告を容れて和解のための使者ポイニクス、大アイアス、オデュッセウスをアキレウスの幕舎へ差し向ける。しかしアキレウスはこの申し出をにべもなく拒絶する。名誉のしるし *γέρας* であるプリセイスを奪われたことへの怒りは生半可なことでは鎮まらないのである。彼は言う、「しかし、彼奴がこの手から、手柄のしるしであるもの *γέρας* を奪い、かつわたしを欺いたからには、今更わたしの気持を試そうとしても無駄なことだ、こちらには何もかも判っている、彼奴にわたしを言いくるめることなどできるはずがない」(第9歌344～45行)、また「彼のくれるという贈物など真平だ、〈略〉腹が煮えかえるほどの非道を犯した罪の償いをせぬ限り、アガメムノンはわたしの気持を納得させるわけにはゆくまい」(第9歌386～87行)と。拒絶されて帰ってきた使者の一人オデュッセウスも以下のごとく報告する、「アガメムノンよ、彼には怒り *χόλος* を消す気はなく、むしろいよいよ猛り狂って、あなたの申し出も贈物も拒んでいる」(第9歌677～79行)と。

しかしこの激しい怒りも終息するときがくる。いや厳密には終息ではない。一旦停止の状態である。パトロクロス戦死の報がもたらされたときである。

## 2. アキレウス、またまた怒る

第18歌冒頭でアキレウスは親友パトロクロス戦死の報せを受ける。「悲しみの黒雲 *ἄχεος νεφέλη μέλαινα*」(第18歌22行)がその身を覆う。今や彼の心を占めるものは怒りではなくて悲しみ *πένης* である。パトロクロスを失った悲しみは、アガメムノンに対するこれまでの怒りをも凌駕する。激しく嘆き悲しむ息子アキレウスの姿を見かねて海より姿を現わした母テティスに向かい、アキレウスはこう言う、「アガメムノンはわたしを怒らせたのですが、

それらのことも、今はやむなく胸の心を鎮めて、辛くはあるが、もう済んだことといたしましょう。さてかくなる上は、最愛の友を討った仇、ヘクトルを求めて出陣いたします」(第18歌111～15行)と。自らに死の運命が待ちうけていることは承知の上である。この決意は母親テティスにだけ打ち明けられたものであるが、ギリシアの軍勢全員を前にした場(第19歌)でも同じ決意を披瀝する、「だが既に起ってしまったことは、辛いことではあるが済んだこととし、今はやむを得ぬ事情であるから胸中の気持を抑えて忘れましょう。さればわたしは今ここで怒りを収めることにする、そもそもわたしがいつまでも腹を立てていてはならぬのだ」(第19歌65～68行)と<sup>8)</sup>。この悲しみは怒りと裏腹である。親友を殺した敵将ヘクトルへの復讐心がそれである。この新たな怒りが古い怒り、アガ멤ノンに対するあの怒りに取って代るのである。ギリシア軍に損害を与えることによってアキレウスの存在理由を明示するというゼウスの計画は果された。パトロクロスまでもが失われたのだ。だがそのパトロクロスの死が新たな展開を呼び起した。アキレウスの屈辱を雪ぐこと(ゼウスの計画)がアキレウスの心に多大な悲しみ(パトロクロスの死)を引き起すことになり、ひいてはそれが彼に出陣を促すことになる。事態は一転してギリシア軍の劣勢からトロイアの滅亡へと向かう。

ただここで、アキレウスが古い怒りを忘れ新しい怒りに駆られてヘクトルへの復讐を口にする場で、また実際の行動面でも以前のサボタージュから戦線へ復帰するときに当って、その確たる理由が何であるかは告げられていない。先にブリセイスを奪われ戦場を離脱した際には、アキレウスの行動またその精神状況は〈名誉〉という価値観で説明された。しかしこの新しい展開の場ではその行動原理は明らかにされていない。ただ「最愛の友を討った仇、ヘクトルを求めて出陣する」(第18歌114～15行)と言われているだけである<sup>9)</sup>。愛する者であると同時に英雄の証 *γέρας* でもあるブリセイスを奪われたとき、アキレウスはその辱めを雪ぐべくアガ멤ノンを殺害しようとした。しかしそれはアテナ女神に阻止され、彼の怒りは屈折された形で戦場離脱という結果に終らざるを得なかった。但し雪辱の思いはテティスを介してゼウスの計画へと向かい、間接的に果されることになる。同様に愛する者パトロクロス(これは *γέρας* ではない)を奪われたアキレウスは、今度はその悲しみと怒りをヘクトルを斃すこと(復讐)によって解消しようとする。そこにはもう英雄の行動であることを強調するものはない<sup>10)</sup>。彼をして奮起させるものは衝動的で一途な復讐心、新たな怒りである。その一途さは、出撃前にまず腹ごしらえをと勧めるオデュッセウスに対して、「(報復を済ますまでは)酒も飯もとてもわたしの咽喉を通るものではない、戦友が死んだのだから」(第19歌210行)と答えるところによく表わされている。さらに第19歌の末尾では、出撃に際し彼の名馬クサントスが真近かに迫る死を予言するが、それもアキレウスの逸る心を抑えることはできない。「わたしが父母から離れたこの地で果てる運命にあることは、自分でよく承知している。とはいえトロイア勢に嫌というほど戦いの苦汁を味わせるまでは、わたしはやめぬぞ」(第19歌421～22行)という

のがその答である。

このような彼の激烈な復讐心の前にはかつてのアガ멤ノンに対する怒りも忘れられてしまう。いやむしろ己が腹を立てたことすら後悔の対象になるのである、「あの女（プリセイス）などはむしろ、わたしがリュルネソスを陥して自分のものにしたその日に船の上で、アルテミスが射殺して下さったらよかった。さすればあれほど多数のアカイア人が敵の手にかかって、涯しない大地の土を嘔む仕儀にはならなかつたらう、それもみなわたしが腹を立てたのが因なのだから」（第19歌59～62行）と。

これはどういうことなのか。英雄の勲功の具体的な証である *γέρας*、しかも「最愛の妻 *θυμαρῆς ἄλοχος*」（第9歌336行）と呼ばれるプリセイスをアガ멤ノンに奪われて腹を立てたあのアキレウスはこのアキレウスと別人なのか。腹立ちのあまり戦場を離脱し、母テティスに懇願してゼウスの方でギリシア軍に損害を与えせしめたのは、自ら欲してのことではなかったのか。それをいまになって悔やむとは。この矛盾したアキレウス像はどう解釈されようか。

それもこれも皆パトロクロスの死ゆえである。それは事態を一変させた。しかしこれは *γέρας* に象徴される英雄としてのあり方を全面的に否定するものではないであろう。いまの怒りが以前の怒りを消し去ろうとしているかに見える。これはいまの怒りがいかに大きなものであるか、そしてまた英雄のあり方を限定する *γέρας* とか恥 *αἰδώς*、名誉 *τιμῆ* といった概念とび越えた恣意的な、きわめて個人的な激情であることを示すものに外なるまい。なるほどアキレウスは以前自分が腹を立てたことでギリシアの兵士が多数斃れたことに後悔の念を示した。そしていま出撃に当って、「さればあなたは早速、髪長きアカイア勢を戦いに奮起させていただきたい」（第19歌68～69行）とアガ멤ノンに要請する。一見するといかにも劣勢のギリシア軍のために出陣するかに思われる。だが真実は彼自身のため、己の私怨を晴らすためである。彼の心にはいまヘクトルを斃してパトロクロスの仇を討つこと以外に何もない。ヘクトルを斃すことはトロイアの滅亡につながるが、いまの彼にはそこまでの配慮もまたないと言ってよい。

親友の死という個人的な体験によって前言を翻し、英雄としてのあり方も等閑に付す。この点で彼は利己主義的である。建前よりも己の感情を優先させるという、そういう瞬間もあるという点で。それは頑是ないともいえるし、純粹であるともいい得よう。ここに英雄アキレウスのアキレウスらしさがある<sup>11)</sup>。

そもそもアキレウスは共同体への帰属意識が薄い男である。自らの名誉を優先させて戦場を離脱する姿勢からしてそうである（それが英雄の英雄たるゆえんではあるのだが）。彼はミュルミドン勢50艘の船団を率いてこのトロイア戦争に参加した族長であるが、その輩下の者たちとの関係はいま一つ明瞭に描かれていない。また彼にはその行動を規制する家庭というものが無い。いやそう断言してよいほどその影は薄い。もちろんアキレウスにも妻子がある。妻はスキュロスの王リュコメデスの娘デイダメイアで、二人の間に生れたのがネオプトレモスである。

しかし詩篇中でこの一家に触れた箇所はない。わずかに言及されているのが2ヶ所あるだけである<sup>12)</sup>。父ペレウスは遠い故国にあり、母テティスは女神である。女神の母親が人間の息子と人間界のしがらみの原点である家庭を構成するわけがない。プリセイスは戦場妻たる存在にすぎなかった。アキレウスを取りまく近い者たちは、いないわけではないが、いずれも近い者という以上の存在ではない。すべてアキレウスの行動を規制し縛る方向で彼と接することはない。むしろその存在自体がアキレウスの奔放な行動を容認し助長する媒体として詩篇中に登場してくるのである<sup>13)</sup>。家庭にも属さず社会的制約からも自由なアキレウスは、ある意味で真の英雄たる条件を備えている。若さと力と情熱とを何の規制もなく十全に発揮できるからである。

個人主義者アキレウスは言う、「わたしが死ぬ運命については、ゼウスや他の神々がそれを果そうとなさる時には甘んじて受けるつもり、〈略〉今のわたしは華々しい手柄 κλέος ἑορῶν を挙げることを願うばかり」(第18歌115～21行)と。パトロクロスの復讐も、英雄として名を挙げるための絶好の機会となった感がある。友の死も己の榮譽の糧となる。復讐と名譽、双方を願う気持がいまアキレウスの心の中に共存している。しかしアキレウスにはそのことについて何の屈託もない。英雄とは死を賭して(契機となるものが何であれ)自分一個の名声を追う存在の謂である。そしてアキレウスは正しく英雄と呼べる存在であった。

### 3. ヘクトル、浮世のしがらみ

『イリアス』という詩篇がアキレウスの怒りを主題としていることは、開巻劈頭の1行から明らかである。そしてその怒りは最初アガメムノンに対してのものであったのが、途中で敵将ヘクトルに対するものになり、ヘクトルの死をもって終息する。同時に詩篇そのものも結末を迎える。ここでは詩篇の後半でアキレウスの怒りの対象となるヘクトルの人物像を考察する。ホメロスは彼をどんな姿に描いているであろうか。

その詳細が告げられるのは第6歌である。豪勇ディオメデスらの奮闘のためトロイア軍は苦戦に陥る。ヘクトルは子言者ヘレノスの進言を容れて一時戦列を離れ、アテナ女神に救援を祈願するため城市へ戻る。館まで帰ってきた彼は母親ヘカペに出会う。戦闘の疲れを癒す酒を勧める母の手を制し、アテナの神殿に代参を頼む。次いで弟パリスの邸へ赴き、城内に居残っていた弟を前線に出よと叱咤する。パリスと共にいたヘレネが暫時休息するようにと座を勧めるのも断って、妻子に会いに己の屋敷へと歩を運ぶ。しかし妻アンドロマケはトロイア方の苦戦を聞いて不安を覚え、城壁の大櫓まで出掛けて留守である。急いで取って返すヘクトルがスカイア門まで達すると、そこへ妻が幼児アステュアナクスを抱いた侍女一人を連れて駆け寄ってくる。夫の身を案じて家をとび出した妻、妻子に会いに帰ってきた夫、行き違った夫婦が路上で偶然に出くわす。この些か手の込んだ邂逅は、もちろん作者の手管の一つである。そしてこ



の甘美な再会は、さし迫る破滅の前であるだけによけいにその甘美さを増す。戦時の喧噪をよそに、細やかながら微笑ましい一小家庭の集いがここに現出する。しかしこの甘美な再会の場には、また忍びくる不吉な運命への予感と不安が影を落している。

アンドロマケは言う、「あなたはひどい方、その勇気 *μῆνος* があなたの命取りになるかも知れぬというのに、幼い坊やのことも、やがてあなたに先立たれて独り身になる不運なわたしのことも憐れんでは下さらぬ。間もなくアカイア軍が一斉に押し寄せて来て、あなたのお命を奪うでしょうに」(第6歌407～10行)と。またすでに父母兄弟を亡くしている彼女は、「あなたはわたしにとって父であり母であり、また兄であるとともに、あなたはわたしの頼もしい夫なのです。どうか哀れと思ってこのままこの櫓に残り、子を孤児に、妻を寡婦の身にはなさないで下さい」(第6歌429～32行)と懇願する。この再会の場に不吉な影を落とす死の予感は、ヘクトル自身もすでに表明しているところである。先のパリス・ヘレネ夫婦との対話の際、座を勧めるヘレネに向かって彼が口にした言葉、「〈略〉わたしはこれから家に帰り屋敷の者ども、それに妻と幼い体に会いにゆくところなのだ。もう一度会いに帰って来てやれるかどうか判らぬし、ひょっとしたら神々は、わたしをアカイア人の手によって亡き者になさるかもしれぬでな」(第6歌365～68行)がそれである。

先のアキレウスの場合も真近かな死が運命として定まっているといわれた。そのことを母神テティスも、また当のアキレウスも認識していた。神の身のテティスの言うことなのであるから。その上でアキレウスは出撃し、テティスはその準備(武具の調達)を調えた。ヘクトルらの場合はどうか。ヘクトルとアンドロマケはヘクトルの死をアキレウスのそれほど確定的なものとして認識してはいないかもしれない。それはまだ漠然たる予感である。しかし戦士たる存在は常に死と隣り合せにいる。この10年間、両軍を問わず戦士らは常に身近かな死を意識せざるを得なかったであろう。第6歌のこの場はそうした戦士の死の意識を描く場の典型として取り上げられたものとも考えることもできる。

それはさておき、迫りくる夫の死を予感したアンドロマケは、夫ヘクトルにこのまま前線へ戻らず城内に留まるよう強く求める。アキレウスの死を確信し、もちろんそれを悲しみはするが武具を調達してやって戦場へ送り出したテティスとは、この点で大きく違う。ここには神と人間のあいだにはおそらく成立し得ない家庭というものの存在が大きく作用しているであろう。家庭は人間が社会生活を送る上での最小の生活単位である。その家庭の崩壊を愁い、安寧を願い、未来の幸福を求めるのは人の世の慣いである。アンドロマケは一家庭の構成員としての立場から発言している。いま享受している幸せを家長のヘクトルが壊すことのないようにと。

ヘクトルもこれには理解を示す。「妻よ、今そなたがいったことは、みなわたしも考えてはいる」(第6歌441行)と。「しかし」、と続けて言う、「もしわたしが臆病者よろしく、戦場から離れて尻込みするようなことになったら、トロイアの男たちにも、裳裾曳く女たちにも顔向

けができぬと、心から思っているのだ。第一とてもそのようなことをする気にはなれぬ、わたしは父上の輝かしい名誉のため、またわたし自身の名誉 *κλέος* のためにも、常にトロイエ勢の先陣にあって勇敢に戦えと教えられてきた」(同、443～46行)と。

彼はやはり戦士なのである。名誉を求めて戦う英雄なのである(彼に付くエピテトンは“誉れも高き *φαίδιμος*”である)。この点でアキレウスと変るところはない。しかしアキレウスと大きく異なる点が2点ある。その一つは、戦士として英雄として名誉を求める彼の行動は、上に引いたように、そうするよう「教えられてきた」<sup>14)</sup>ものだという点である。彼は一人の男子として、しかもトロイアの王位の継承者として、立派な軍事的リーダーとなるための課程をいわば学習したのである。アキレウスにはおそらく先天的に備わっていたと思われる戦士として取るべき振舞い行動を、ヘクトルは努力と克己心で後天的に獲得したのである。ヘクトルは根っからの英雄、戦士ではない。王家の世継に生まれた宿命から帝王学を授けられ、徐々にそれを身につけていったのである<sup>15)</sup>。彼の背には常にその自らの地位に伴う責任感が張りついている。そして背後にいる多数のトロイア市民の期待感を感じざるを得ない。彼は個人的な事情にだけかかずらうことは許されていない。王国の後継者という公的な地位を絶えず顧慮せざるを得ない立場にあるのである。だからこそ愛しい妻のたつての願いも却下せざるを得ないし、妻子の身の上が気にはなりながらもそのためだけには振舞うことは許されないのである。もしそうすれば、つまりいま前線に戻ることを放棄すれば、自軍の兵士や一般市民、女性たちからも臆病者との烙印を押され、リーダーとしての面目を失い、名誉を穢すことになってしまうであろう。かくて彼は個人的理由よりも公的な立場を優先させ、前線に再び戻ることになる。

しかしこれでもってヘクトルは妻子への思いを、愛しい家族への思いを完全に断ち切ったわけではない。妻子への思いは残り続ける。この家族への思いがアキレウスと異なる第2の点である。彼は言う、いずれトロイアに滅びの日が訪れよう、そしてそのとき愛しの妻は捕虜となって敵国へ連れゆかれ、隷従の日を送ることになろう、あれがかつての敵将の妻と指差されながら、しかし「わたしはそなたが敵に曳かれながら泣き叫ぶ声を聞くより前に、死んで盛り土の下に埋められたいものだが」(第6歌464～45行)と。愛する者の惨状を目にしたくないというのは、その愛する者に対する切ないほどの愛情の表明であり、また人間ヘクトルとしての弱さ、人間らしさの表明でもある。ここにわたしたちは彼ヘクトルが家族と強い絆で結ばれていることを認知するのである。そして、前線へ戻ることは家族を捨てることではない。それは結局トロイア防衛に、つまりは己の家族を守ることに繋るのである。

この短い邂逅の場の末尾、その重苦しい空気を払うかのようにヘクトルは愛息アステュアナクスを抱き上げて接吻し、ゼウス神に息子の生長と弥栄を祈願する。アンドロマケにはすべてを運命に任せ、これまで通りの日常の生活、機織りと糸紡ぎへ戻るようにと諭す。そして自らは「戦は男の仕事」と、前線へ戻って行く。戦もしかしこの10年来日常化した生活の一部とな

っていた。

しかしホメロスは、このあと館へ戻ったアンドロマケが侍女たちとヘクトルの帰還に絶望し、その身を悼む悲しみの声をあげたと付け加えている。ヘクトルの死は当人とその妻だけでなく、第三者たる存在にもすでに予感されていたことがわかる<sup>16)</sup>。そして作者はこの死を真近かにした戦士に家族という存在を付け合せた。そしてそのことによって英雄たる存在の新たな側面が浮かび上ることになる。ここにわたしたちはアキレウスとは異なるタイプの英雄を一人見つけることになる。いや英雄族なる存在の別の側面を見つけだすと言ったほうがよいかもしれない。ホメロスは英雄も人間の一人だとして、その人間臭い側面をこのヘクトルに描き出したということであろうか。

#### 4. ヘクトル、突張る

パトロクロスの仇敵ヘクトルを求めて出撃したアキレウスがその仇敵に出会い、両者決戦に及ぶのは第22歌においてである。トロイアの軍勢は前線に復帰したアキレウスの阿修羅のごとき奮戦ぶりに圧倒され、続々と城市へ逃げ帰っていく。城内はそれらの兵士で溢れかえるが、ただ一人ヘクトルだけは城内へ入らずスカイア門の前に立ち、アキレウスを迎え撃たんとする。その姿を見、また遙かよりアキレウスのこなたへと馳せ来るのを認めた老王プリアモスは、城内から息子ヘクトルに声をかけ、決戦をやめて城内へ入るようにと説得する。次いで母ヘカベもまた胸をはだけて乳房を見せ、母親への情に訴えながら城内へ入るよう切願する。しかし両人の願いはヘクトルには伝わらない。ヘクトルは頑なである。ただヘクトルの心中も揺れ動いている。

先にヘクトルは、アキレウスの戦線復帰を機に船端まで攻め込んだトロイアの軍勢を城市へ引き上げさせようとの僚友ブリュダマスの提案を、愚案として一蹴したことがあった(第18歌249行以下)。だがその結果は裏目と出て、いまトロイア勢はアキレウスに追い立てられ、這々の体で逃げ帰って来ている。いま自分もまた城内へ逃げ込めばブリュダマスが真先に咎めよう。そして多くの兵を失ったいまとなっては市民にも合わせる顔がない。城内へは入ろうにも入れないのである。これは面子の問題である。彼は英雄としての、個人としての名誉を優先させた。英雄としての名誉を重んじる気持が、アキレウスとの無謀な一騎討を選ばせたのだ。そして総大将としての責務を放棄し、籠城しても守るべきトロイア、その市民、一族、家族の運命を閑却したのである<sup>17)</sup>。彼もまたアキレウスと同様、英雄族の一人であったのだ。ただこのときヘクトルは、まさにヘクトルにしか考えられないようなことを考える。アキレウスと交渉し、10年戦争の因となったヘレネを財宝ともども返却し、かつトロイアの城市のもつ財宝をも二分してその一半をギリシア方に提供することによって、この戦争を終結させようというものであ

る（第22歌111～21行）。しかしすぐに彼は思い返す。アキレウスがこれを受け容れるわけがない。それでも彼は一応は交渉の可能性を考えるのである。結局対決は必然である。かくて彼はアキレウスを迎え撃つ。

しかし迫り来るアキレウスの姿を目にするやヘクトルは恐怖に襲われ、突然逃げ出す。それを追うアキレウス。両者そのまま城壁の周りを3周する。そこへ突如ヘクトルの弟デイポボスが援軍として現われ、兄ヘクトルを決戦へと促す。しかしデイポボスと見えたは女神アテナの化身であった。女神に謀られたヘクトルはそれと知らず、意を決してアキレウスとの一騎討に臨む。そしてこのときヘクトルはアキレウスにある申し入れをする。いずれが勝つにせよ、勝った方は相手の武具は剥ぎ取っても屍の方は味方の者へ返却することを、神を証人として取り決めようではないか（第22歌255行）というのである<sup>18)</sup>。

この申し入れをアキレウスは拒否する、「憎みても余りあるヘクトルよ、わたしに向かって取り決め *συνημοσύνας* などとふざけたことをいうでない。獅子と人間との間に堅い誓いなどある筈がなく、また狼と仔羊とが心を通わせることはなく、常に互いに悪意を抱いているのだ。それと同じく、わたしとおぬしとが親密になるなどあり得ぬし、どちらかが倒れて、頑丈な革の楯持つ軍神を血に飽かすまでは、われらの間に誓いなど立てられるものでもない」（第22歌261～67行）と。ここに見られる「取り決め *συνημοσύνη*」なる語は、『イリアス』全24歌中ただここ一箇所にしか出てこない語である<sup>19)</sup>。ということは、この語のもつ概念も詩篇全体の中でたいへんに珍しいものであるということができよう。先にヘクトルが口にした取り決めなる語 *ἀπόμνηται*（第22歌255行）も全篇で唯一使用された語であった（註18参照）。争い事と取り決め（協定と言い直してよいもの）は、元来相反するものである。取り決めが破れるからこそ、また取り決めが不可能となるからこそ争いが生ずるのである。一方また人間は争い事に無制限の暴力と無秩序を許さぬために一定の取り決めを設けようとする。しかしそれも取り決めを行う両者が理性ある存在であることが前提である。いまアキレウスは自分をそのような理性ある存在とは思っていない。彼はヘクトルとの彼我の関係を人間と獅子、仔羊と狼との関係と捉える。この両者間にはいかなる種類のものであれ、取り決めが成立するはずがない。アキレウスが自らを獅子、狼に擬するのは相手への怒りと憎しみのせいである。パトロクロスが殺されたためによる悲憤と、殺害者ヘクトルへの怒りと憎悪は人間理性を忘却させ、眠っていた獣性を覚醒せしめたのである。しかしヘクトルの取り決め提案に対するこの拒絶は一時の激怒のせいばかりではないかもしれない。元来彼は社会生活に不適合な性格であった。いや言い方を換えよう、篇中彼は社会生活や家庭生活とは距離を置いた存在であるように描かれている。彼は常に個として発想し、個として行動している。対人関係は自らの利害（精神的にも物理的にも）でもって量られる。プリセイスの件も、彼女への愛情のためというよりはむしろ己の面子を潰されたから怒るのである<sup>20)</sup>。パトロクロスの件では親友の死への悲憤が専ら強調

されているが、そこにはまた貸与した武具喪失による屈辱感もあることが看過されてはならないだろう。こうした個人主義者アキレウスが理性ある人間同士、社会生活を営む者同士の間でのみ成立しうる取り決めに意を用いるはずがないのは当然のことである。この個人主義的傾向は彼の個性に帰せられるものであろうか。それとも一つの種の通癖であって、彼はその代表者なのであろうか。

ヘクトルの取り決めの提案はアキレウスに対する畏怖の情のなせるものである。この期に及んでこの行為は怯懦と評されても仕方ないものである。しかし彼がこの種の申し入れをするのは、これが初めてではない。同じような申し入れを彼はギリシア軍相手に行なっているのである（第3歌84～94行）。それは、戦争の直接的当事者であるパリスとメネラオスがヘレネの身柄とトロイアの全財産を賭けて一騎討をし、勝者がそれを得、それでもって戦争を終えることにしてはどうかというものである。メネラオスもこれに同意し、二人は雌雄を決することになる。戦闘に倦んだ両軍の兵士らもこの一時休戦を歓迎する<sup>21)</sup>。対決はメネラオスの優勢のうちに推移するが、女神アプロディテの介入によってパリスは辛うじて危機を脱し、結局結着のつかぬまま終ることになる。そして休戦の誓約 *ἄρκια* は、これまた女神アテナの使囀によりパンダロスがメネラオス目がけて矢を射込んだのをきっかけに破られてしまう。

この二度にわたるヘクトルの提案は彼の人物像の一端を垣間見させてくれる。彼は有能な戦士でありながら、しかも戦争の最中でありながら戦争の終結、その平和的解決を志向しているかに見える。10年に渉る戦争の一方の当事者を平和主義者と呼ぶのは憚られる。しかし彼は機会があればそれを捉えて、長びく戦争を終らせる方向に力を尽すことを厭わない。それは彼が常に自分の背後に家族、一族またトロイアの市民の存在を意識しているからに外ならない。彼が一面で己一身の名誉を追求する戦士であることは明白な事実である。反面彼はトロイア市民の安寧を心がける為政者でもある。多数の安寧を第一に考えるとき怯懦となるもやむをえない。ヘレネ誘拐の償いを求めて攻め寄せたギリシア軍とちがって、彼には戦うための大義名分が稀薄である。辛うじて祖国防衛が戦争目的となるだけである。ゆえにそこでは個人的名誉の追求は二の次にならざるをえない。この点で彼はまたアキレウスとは全く状況を異にするのである。

最初の提案（第3歌の休戦協定）はギリシア側にも受諾され、休戦が実現した。二度目の提案（第22歌のそれ）ははなから拒絶される。結果ヘクトルの怯懦ばかりが浮き彫りにされたかに見える。しかし彼の態度振舞いを怯懦であるとみなすとしても、その怯懦は人間が社会生活を送っていく上でのルールの大切さを明示するものともなるのではなからうか。怯懦な人間は怯懦であるからこそ、社会生活を脅かすさまざまな事象に対処すべきルールを設ける。戦争という日常生活の中の暴力を予防しあるいは抑制するための措置、休戦の誓約 *ἄρκια* とか取り決め *συνημοσύνη* とかいうものがそれである<sup>22)</sup>。取り決めの申し入れは怯懦であるから

こそできるのである。怯懦でないアキレウスはこれを拒絶するが、そのことによって逆にアキレウスの蛮勇が、あらゆる人間生活の中のルールに背を向けるその未開性が浮き彫りになってくるのである。

未開の族長の息子アキレウス。人間的絆を絶ち切り、共同体の枠内に留まることを拒否し、自分一個の価値観、名誉のみを重視する戦士。まさに彼は英雄族の代表である。一方ヘクトルは、戦士でありながらその人間的側面にその描写の比重が置かれている。彼には常に共同体がついてまわる。家族、一族、市民、共同体——それら抜きでは彼は存立しえない。「ヘクトルは都市国家の世界、己れの土地と権利を守る共同社会の先ぶれである」とボナールは言う（上掲書、76頁）。怯懦な戦士とは市民の謂である。怯懦な英雄ヘクトルは未開の族長の息子、勇敢な英雄アキレウスによって斃される。しかしヘクトルは最後の瞬間にトロイアを、自らの属する共同体を裏切った。城内へ入って祖国防衛を画策せず、無謀なアキレウスとの一騎討を選んだのであった。彼もまた最後は英雄としての個人主義に殉じたのである。ただ彼は斃されつつも来るべき市民社会の到来を予告することになる。勝者アキレウスは勝利しつつその存在の古色蒼然たる様を提示することになる。そしてその死もまた近い。英雄族は滅びの種族なのである。

## おわりに

アキレウスは古い滅びゆく英雄族を標徴し、ヘクトルは英雄族に属する者でありながら、新しい来るべき市民を、その一端を標徴する。しかしこれはそれぞれ独立した二つのタイプ、二人の戦士の姿ではなくて、一人の戦士のそれぞれ相異なる二面にすぎないのではなからうか。アキレウスも実は人間臭い側面を全く見せないわけではない。第24歌、プリアモス老王が息子ヘクトルの遺体貰い受けにアキレウスの陣屋を訪れる段で、遺体返還を懇請する際引合いに出すのはアキレウスの父ベレウスである、「姿神々にも似たアキレウスよ、御尊父のことを想っていたきたい、年の頃はわたしほど、厭わしい老いの鬨に立っておられる御尊父のことを」（第22歌486～87行）、また「どうかアキレウスよ、神々を憚るとともに、御尊父のことを思い起して、このわたしを憐れんでいただきたい」（同、503～04行）と。これを聞いてアキレウスは父ベレウスのことを思い出し、息子に先立たれる運命にあるその身を思いやってさめざめと泣き、ついにプリアモスの願いを聞き容れるに至る。それまで彼の身の内外を支配していた激しい怒りはようやく終息するのである<sup>23)</sup>。それは彼にも決して欠如していなかった人間らしさが立ち戻ってきたことを意味する。

アキレウスは根っからの戦士である。しかし人間的側面が皆無であったわけではない。ヘクトルも戦士である。しかし彼の持ち味ははその人間臭さにあった。英雄的強さよりも人間的弱

さにあった。作者ホメロスはアキレウスをそのように描き、ヘクトルをこのように描いた。だがこれは二人の戦士を二様に描き分けたというよりも、一人の戦士のもつ二つの相貌をそれぞれアキレウスとヘクトルに代表させて描いたと言うべきではあるまいか。戦場において専ら名誉のみを追求する非日常的側面をアキレウスに、戦場にあっても常に家族や市民を背後に控え、その存在を意識せざるをえない日常的側面をヘクトルに代表させて描いたのではあるまいか。ヘクトルにしても、もし攻守と場所を代えてトロイア軍がギリシアへ攻め込んだとすれば、ちょうどアキレウスのように非日常的英雄精神を発揮していたことであろう。そしてアキレウスは祖国防衛の戦いの中でさまざまな日常的しがらみに苦しまなければならなかったであろう。

二人の対決はアキレウスの勝利に終る。未開の族長の息子の蛮勇が怯懦な、それでいて理性的な市民代表を圧倒したのである。だがアキレウスとていずれ死なねばならない。それは篇中に何度も予告されている。相手方の大将を斃しトロイア戦争における軍功第一の名声を得て、アキレウスは退場していくのである。この英雄族の代表の名誉ある退場を描くことこそが、作者の目的ではなかったろうか。第1歌冒頭に告げられたアキレウスの怒りは全24歌を経ていまようやく終息するが、それこそが名誉を第一とする英雄族の光と影の物語であったのである。しかし作者が描こうとしたものは英雄族の滅びだけではない。ホメロスはアキレウスに対してヘクトルを配した。ヘクトルは敗者である。彼もまた最後は英雄として死んだ。しかし彼は敗れつつも来るべき新しい時代相を予告したように思われる。共同体の中で生き、生かされる人間像がそれである。アキレウスを滅びゆく種族の代表とするなら、ヘクトルは同じく滅びゆく英雄族が属しながら、同時に来るべき市民社会を担う人物、いやその先触れであるといえるのである。

「イリオスの歌」はアキレウス讃歌ではない。讃歌とみえつつ、実は挽歌なのである。作者ホメロスは暗黒時代の明ける前8世紀半ばにあって、古い英雄伝説の主人公のアキレウスの側面を嘆賞しつつ歌い送り、人間味豊かなヘクトルの側面を新たな時代の招来のしるしとしてそこに歌い添えたのである。「詩人はなぜアキレウスの怒りをトロイア戦争全体と関連させて『イリオスの歌』として語ったのかという疑問」(岡、上掲書、48頁)への回答はみつかったろうか。わたしたちはこう言えるのではないか。トロイア戦争の物語をまず英雄族の滅びの物語として捉え描くこと、それが作者ホメロスがアキレウス立腹のエピソードを詩篇のテーマに選んだ理由であると。

註

1. テキスト上では  $\mu\eta\upsilon\epsilon\iota\nu$  という対格形 ( $\mu\eta\upsilon\epsilon\iota\nu \acute{\alpha}\epsilon\iota\delta\epsilon, \theta\epsilon\acute{\alpha} \Pi\eta\lambda\eta\gamma\acute{\alpha}\delta\epsilon\omega \text{ Ἀχιλλῆος } 1$ )。なお、訳文は松平千秋訳(岩波文庫)を借用させていただく(以下同)。
2. 第2歌134行以下を参照。「大神ゼウスの廻らせ給う年もすてに九つを数え、軍船の船板は腐り、綱具も朽ち落ちた」とある。
3. アリストテレス『詩学』1459a30。訳は岩波文庫「アリストテレス『詩学』ホラーティウス『詩篇』」(松本仁助・岡道男訳)に拠る。またこの項に付けられた註(203頁)を参照。  
 岡はこのアリストテレスの主張するところに添う形で、しかもトロイア戦争という全体構造とアキレウスの怒りというエピソードとの間に対比的相関関係のあることを指摘しつつ、その『イリアス』論を展開している(岡道男『ホメロスにおける伝統の継承と創造』第3章『イリアス』とアキレウスの怒り——ヘレネ、クリュセイス、ブリセイス——、創文社、1988年、45～73頁)。岡は言う、「クリュセイスをめぐる事件は、王の驕り、神と人間の怒り、和解において、ブリセイスをめぐる事件すなわち『イリアス』全体をいわば縮小した形で反映する。同様にクリュセイスとブリセイスをめぐる葛藤(『イリアス』)は、人間の  $\acute{\alpha}\tau\eta$ 、神と人間の怒り、都の滅亡(ヘクトルの死)において、ヘレネ誘拐の物語すなわちトロイア戦争の物語を縮小した形で反映する。このように全体を、たんに網羅的に(例えば年代記のごとく)捉えるのではなく、ある限られた部分に集中・投射する形で把握・描出すること——その結果全体はその多様性のゆえに錯雑した姿に陥ることなく、かえって見通しのよききもの( $\epsilon\upsilon\sigma\upsilon\nu\delta\omicron\pi\tau\omicron\nu$ )となる——それは当時の叙事詩人に独特な、事象の把握の仕方を示すものといえよう。これは上に見たごとくエピソードの技法の発展・拡大の過程において生み出されたと推測される」(70～71頁)と。ここにはアキレウスの怒りという1エピソードと「イリオスの歌」という題目の表示するトロイア戦争全体とのパラレルな関係そのものは過不足なく捉えられている。しかしそれは技法の問題であって、トロイア戦争全体を歌うのに、すなわち詩篇は「イリオスの歌」と題されているのになぜアキレウスの怒りというエピソードが取り上げられているかというエピソード選択の意図、つまりは作歌の本質に関わる問題の説明はなされていない。トロイア戦争全体から1部分だけを取り上げたホメロスは神技の詩人というアリストテレスの言は確かに一面の真理をついているが、なぜその部分(エピソード)がアキレウスの怒りであって他のものでないのかという問いの答にはなっていない。岡が掲げた「詩人はなぜアキレウスの怒りをトロイア戦争全体と関連させて『イリオスの歌』として語ったのかという疑問」(岡、同書、48頁)は残り続けるのである。
4. 作者ホメロスは主題となるエピソードを選択することができた。そしてそうしたのである。Cf. P. Mazon, *Introduction a L'Iliade*, Paris, 1959, p. 145～146.
5. この  $\tau\iota\mu\acute{\eta}$  は“具体的な補償、代償”の意。Cf. W. Leaf & M. A. Bayfield, *The Iliad of Homer*, vol. 1, Macmillan, 1962, ad l. 159. また第3歌286行参照。
6. 実際にブリセイスをアガメムノンに奪われるのはこの台詞のあとである。ブリセイスを奪い取ると公



言されたアキレウスは思わず刀の柄に手をかけるが、アテナ女神に止められる（第1歌188行以下）。

7. この「ゼウスの計画」がどこで終るのかという問題がある。第15歌64～71行の真偽問題も含めて種々議論がある。川島は第24歌のアキレウス・ブリアモス和解の場まで続くとし（川島重成『『イリアス』ギリシア英雄叙事詩の世界』岩波セミナーブックス37、岩波書店、1991年）、岡は詩篇『イリアス』を超えて近い将来に起るはずのアキレウスの死とトロイア陥落にまで及ぶとみなす（上掲書、64頁）。私見では、ヘクトル麾下のトロイア勢がギリシア軍の船庫まで攻め込み、船に火を放つところまでとしてよかろうと思われる。「つまりはアカイア勢が倅を大切に扱い、然るべき償いをして名誉を回復するまで、トロイエ方に力を与えてやっていただきたいのです」（第1歌509～10行）とテティスはゼウスに請願している。
8. この箇所は原文では先の第18歌112～13行と全く同文である。formula の一例であるが、この繰り返しにアキレウスの意志の固さが良く出ているともいえる。
9. ここでわたしたちは岡の言う対比の論理を思い出すべきかもしれない。愛する者を奪われて怒り、その補償を求めるという行動パターンは、ヘレネを奪われトロイア戦争を起したメネラオス、プリセイスを奪われて戦場を離脱したアキレウス、そしてパトロクロスが殺されて戦場に復帰するアキレウスに、それぞれ明白な相似関係をもって認められるというわけである（上掲書、67頁）。
 

しかしこれは対比関係を適用した類推にすぎないともいえるのではないか。一応は愛する者を剥奪されたことへの怒りという括りでこの三者は捉えることができるけれども、アキレウスにとってパトロクロスとプリセイスのもつ比重はやはり違うのである。それは量的な違いというより質的な違いである。いや量的なものが昂じて質的なものに変化したというべきであろうか。パトロクロスは *γέρας* ではないのであるから。アキレウスが二度目に怒るとき以前の怒り（プリセイスに関わるそれ）を全く否定し去るところにそれはよく表われている。

パトロクロスのもつ意味はヘレネのそれともまた違う。ヘレネの場合は神聖な結婚の誓約への侵害であるが、パトロクロスにはそれに相当するものはない。
10. パトロクロスに貸与した武具をヘクトルに奪われたことはアキレウスにとって屈辱（戦士としての名誉を穢される行為）であるといえるかもしれないが、これは彼の奮起の主要原因とはなり得ていない。
11. アキレウスは、元来自分はトロイア人に何かの恨みがあるわけではない、ヘレネ誘拐の件でメネラオスのために出征したにすぎないという言い方をしている（第1歌148行以下）。このことは、損害（妻女の拉致）の補償 *τιμή* を求める行為は戦士たち相互に共通の認識であったことを窺わせる。
12. 第19歌327行、第24歌467行がそれである。前者は後世の挿入であろう、後者も疑わしいと Leaf & Bayfield は言う。Cf. Leaf & Bayfield, *op. cit.*, ad 19.326. Ameis/Henze もこの1行（19.327）は、すでにアレクサンドリア期のアリストパネス、アリスタルコスが後世の挿入として排除していることをあげて、疑わしいとしている。Cf. K.F. Ameis / C. Henze, *Homers Ilias*, Leipzig, 1896, ad 19.327. いずれにせよホメロスはアキレウスを家庭という絆から切り離された存在として描いているように思われる。
13. もちろんテティスもアキレウスの出陣を喜ぶわけではない。しかし肉親としての情に訴えて無用に引きとめることはしない。アキレウスが短命であることを承知しながら新しい武具の調達を手配するの

## 英雄の死

- である。この点はヘクトルとヘカベあるいはアンドロマケとの関係とは少々事情を異にする。
14. 原文では μάθον (学んだ) という能動形で表示されている。Cf. W. Schadewaldt, *Von Homers Welt und Werk*, Stuttgart, 1965, S.220.
  15. ボナールもヘクトルの勇氣は理性にもとづく勇氣、生来の性質を克服して得た勇氣だと言う。A. ボナール『ギリシア文明史』I、岡道男・田中千春訳、人文書院、1973年、68～70頁参照。
  16. 但しこの第6歌の別離の場がそのまま夫婦の今生の別れとなったわけではない。このあともヘクトルは城市へ帰参していることは第7歌310行、同429行から知られる。ただそのとき彼がまた妻子と会ったか否かはわからない(明示されていない)し、また会っていてもいなくても、それはそれでかまわないであろう。第6歌で描かれたような別れは戦時中の10年間常にあり得たわけで、それが偶々第6歌で取り上げられて別離の典型的光景とされたにすぎない。第7歌の帰還の条を「古い分析派の流儀で矛盾として難ずる必要はない」(松平千秋訳『イリアス』上、岩波文庫、注、416頁)というのには当たっている。また W. Schadewaldt, *Hektor in der Ilias*, In: *Hellas und Hesperien*, I, Zürich, 1970, S. 21 ff. 参照。
  17. この点に関しては中山に鋭い指摘がある。中山恒夫「東洋から西洋へ——ウェルギリウスの場合——」『地中海学研究』I、地中海学会、1978年、14頁参照。
  18. ここで使われている“取り決め”なる語の原語は ἀρμόνεται である。この語は『イリアス』ではここ一箇所しか使用例がない。
  19. 但し類縁語の συνίημι が“取り決める”の意で第13歌381行(συνώμεθα)に使用されている。
  20. アキレウスはブリセイスのことを“最愛の妻 θυραρχῆς ἀλοχος(9.336)”と言っている。しかし彼の怒りの因は γέρας を奪われたことへの屈辱感によるほうが大きいと言わねばならないであろう。
  21. この提案の実際の主はパリスであるが、それを総大将ヘクトルが両軍の前で公言する役を引き受けている。このときアキレウスは戦線離脱して現場に不在である。もしいたとしたらこの休戦協定に反対したであろうか。彼を獅子にし狼にするパトロクロスの死は、この時点ではまだ現実とはなっていない。
  22. ヘクトルがアキレウスに対して申し入れたこの取り決めを、ボナールは初歩的な形ではあるが国際法の原理に外ならないと断言している(上掲書、73頁参照)。
  23. 〈アキレウスの怒り〉がどこまで持続するものかという問題については、川島もこのブリアモスとの和解をもって終息するとしている(上掲書、59頁以下参照)。岡の主張のように〈ゼウスの計画〉と厳密に照応させて詩篇の外まではみ出させる必要はないのではないか。

(たんげ・かずひこ 外国語学部教授)